母のあの一言から

入善町立入善西中学校３年　　中村　拓人

僕が、胎児の時に「水頭症」という病気が進行していたという事実が生まれてから分かりました。生まれる前にその事実が分かっていれば、家族は慌てずに済んだはずなのに、残念ながら、生まれた後に分かったことなのです。だから、家族の話によると、ものすごく産院内でも看護師などの人たちが慌てふためく状況だったそうです。すぐに大きな病院に運びこまれたので、なんとか一命を取りとめることはできました。しかし、後に両下肢機能などに著しい障害が残りました。

さて、そのことを皆さんに理解してもらった後に僕の考えについて説明していきましょう。

税金の使われ方は財務省のホームページによると、公共事業費や防衛費などです。その中で、僕は「社会保障費」というものに焦点をあてていきたいと思います。社会保障とは国が「社会保険」という必ず国民が入らなければならない保険の下、国民の生活を守ることを指します。僕は、障害がある関係で、親が「障害児福祉手当」などの手当をもらっていることを聞いたことがあります。「障害児福祉手当」は国から出ています。また、そのことを自分で詳しく調べたとき、国から出ている手当や保障はたくさんありました。しかし、もらっている手当や保障の基は、税金です。僕には、それが罪悪感にしか感じられませんでした。僕の障害の等級は一級ですが、自分の感覚ではそのような重い障害ではないと思っています。そのような感覚から、手当をもらっていることが「貴重な税金から、わざわざ支出してもらって申し訳ない。」という罪悪感の気持ちに支配されていました。その気持ちは僕の将来の夢に関する母の

「将来のためにお父さんが貯金してくれているはずだから、将来の医療関係の仕事に携わる夢は叶えられると思うよ。」

という発言から、払拭されました。それと同時に、税金への見方が変化しました。税金は乳児から高齢者、障害の有無、男女の違いなどの差を埋める素晴らしいものだという考えがこれらのことを通して、生み出すことができました。僕が生まれる前に「水頭症」を発症していたことが分からなかったことと逆に、僕の将来の夢は、ハッキリと決まっています。これにより、将来のプランも自然と決まります。生まれた時のように焦ることはありません。僕の将来の夢を決定づけたのは母のあの一言でした。

税金への考え方が人それぞれ違う中で、税金を納めることへの意義を感じない人もいるでしょう。それでも、何か税金が私たちの役に立っているのです。僕の場合は身近に感じることができました。その経験を基に、将来は感謝の気持ちをもちながら、税金を納めていこうと思います。